Chapter 21 : **ワリオウェアの後、グレムリンの更生**

ワリオウェア株式会社──  
現在はバンギラスの“まともな”企業帝国に買収され、  
その中でも珍しく良心的なゲーム会社として君臨していた。

プレミアムゲーム、課金＝強さではなく、  
「払ったぶんだけ笑える」を信条に掲げていた。

　｜　**「課金は笑いのために。強さのためじゃない。」**

社内では、サングラスをかけた火ベルトの筋肉猫・ガオガエンが  
開発兼用心棒として働いていた。

昼はコードを書く。夜は厄介者をぶん投げる。そんな日々。

一方、ヤミラミは汚れた清掃員の制服のまま、  
こっそりバックオフィスに忍び込み、ニヤリと笑った。

電源の入った端末がそこにあった。机の名札には──**「ガオガエン」**。

ヤミラミ：「へっへっへ……これで『トイレ・テイルズ：ゼラファイル編』アップロード完了だな！」

キーボードを爆速で打ちまくり、  
効果音、モーショングラフィック、「うんこカウンター」などを追加。  
ゼラオラの絶叫に応じて数値が上がる仕様にしてご満悦。

さらにゲンガーの過去の発狂映像までゲスト出演させようとしていた──そのとき。

──**バン！**

フライパンほどのデカい前足が首根っこを掴んだ。

ガオガエン：「怪しいニオイがするな。あと洗ってないゴブリン臭も。」

言葉少なに、ヤミラミを窓から全力投擲。  
まるでパッチ当日のゴミ掃除のごとく。

──**クラッシュ！！！**

ヤミラミは空中を飛び、  
「ワリオウェア・ミニゲームジャム開催予定！」と書かれた看板に激突し、  
ゴミ箱にダイブした。

その頃、エレガントなマスカーニャがコーヒー片手にオフィス前を通りかかった。

ガオガエンはすかさずたてがみを整え、壁にもたれてニヤリ。

ガオガエン：「よぉ、キティキャット。ミニゲームでもどうだ？　ついでにディナーとか？」

マスカーニャは軽く頬を染めつつ、目をそらして言い返した。

マスカーニャ：「先週クラッシュしたサーバーみたいにならなければ、考えてあげてもいいわよ。」

その頃ゴミ箱の外では、ヤミラミがドロドロになりながら頭を出し、ニタリ。

ヤミラミ：「ふーん、職場でイチャついてんのか。  
よし、今度は“スパイシーな”情報リークと、“うっかり”なサボタージュでデート台無しにしてやるぜぇ……！」

そして再びガオガエンの“キャットパルト”で  
金属パイプに突っ込まれたヤミラミは、滑り落ちた先で頭からラベンダー香るタオルに突っ込んだ。

目をパチパチさせたそのとき、背後のドアがギイィ……と開いた。

振り向いた瞬間、ヤミラミは凍りついた。

エーフィがサイコパワーで前足を乾かしながら、睨んでいる。

隣には、ツンとしながらも優雅なアマージョが、  
ツルで花びらローションを塗っていた。

エーフィ：「……ヤミラミ。ここは女子トイレよ。説明、聞かせて？」

ヤミラミ（ぐへっ）：「い、いや違うって！　間違って落ちただけで！  
ガオガエンのパワーアームが悪いんだってばぁぁ！」

エーフィの耳がピクリ。サイコバリアが形成されようとした、その時──

アマージョが前に出て、首をかしげる。

アマージョ：「ちょっと待って。このゴブリン……見覚えあるわ。」

じっと見つめて、顎にツルを当てて考える。

アマージョ：「確か……モンアカデミーの“いたずらマネジメント101”にいたよね？  
掃除用カートに潜んで授業潜り込んでたグレムリン……」

ヤミラミ（逆さのまま）：「それ！ おいら！ 『予測不可能カオス理論』で首席取ったやつ！」

アマージョ、くすりと笑う。

アマージョ：「だったら……使えるかもね。エーフィ、ちょっと聞いて。」

エーフィは眉をひそめるが、バリアを消す。

アマージョ：「あたしたちのf2pインディーゲーム、イベントランナーが欲しいの。  
カオスで、予測不可能で、でも変に情熱的。そういうの、今の若い子にはウケるのよ。」

エーフィはため息をつきつつ、最終的にはうなずいた。

エーフィ：「……いいわ。ただし、図書館アーカイブに単独で入ったら、  
即座に\*\*“バクフーンの税金理論TEDトーク”\*\*にテレポートさせるから、そのつもりで。」

ヤミラミは大げさに一礼。

ヤミラミ：「了解！ カオスは……**責任持ってやります！！**」

**新たな役職を獲得！**  
ヤミラミ、F2Pギャラクシーゲームの**公式イベントゴブリン**に就任！！